

# ティリッヒとカント

## - 近代キリスト教思想の文脈から -

京都大学 芦名定道

### 1 問題設定

今回取り上げる「ティリッヒとカント」というテーマには、次の三つの問題が重層的に含まれている。まずもっとも大きな問題設定は、宗教あるいは神学と哲学との関わりをどう考えるのかということ、つまり「神学と哲学」という問題であり、「ティリッヒとカント」はこの大枠の問題設定に対する典型的な事例として位置付けられる。第二のやや範囲を絞り込んだ問題設定として挙げられるのは、ドイツ・プロテスト神学とドイツの古典的哲学（カントおよびドイツ観念論）との関係性という問題であり、「ティリッヒとカント」はこの思想的問いを具体的に論じるための焦点となる。そして、最後のもっとも狭く絞り込んだ問題設定が、ティリッヒにとってのカントの意義、あるいはティリッヒのカント論である。以下の発表では、こうした三重の問題設定がすべて何らかの仕方意識されているが、時間の関係上、最後のもっとも範囲を絞り込んだ問題が主な議論の対象となることをご了解いただきたい。

ティリッヒのカント論に入る前に、この問題設定について必要な補足説明を行っておきたい。発表題目の副題に示したように、あるいはすでに第二の問題設定として示唆したように、近現代のキリスト教思想の文脈においてカントの影響は決定的な意味を有している。その影響の範囲は、いわゆるキリスト教神学における新カント学派とも言われるリッチュル学派に限定されない広がりを見せている（ボンヘッフアーの『行為と存在』やパネンベルクも指摘するように）。ここから、宗教思想との関わりにおいて、カント哲学がきわめて多面的な内容を有していること、したがって、神学の倫理化などといった仕方単純に把握できないということがわかる。ティリッヒのカント論は、こうしたカント哲学の多面性を視野に入れた議論を行っており、キリスト教思想にとってカント哲学がいかなる意味を持つかを論じる上でも興味深い。なお、ここでティリッヒのカント論として取り上げる文献は、レジュメに示した通りである。

### 2 ティリッヒのカント論の概要

自伝によれば、ティリッヒがカント（『純粹理性批判』）と出会ったのはギムナジウムの学生時代、つまり哲学者になることを志ようになった頃に遡る。それ以来、生涯カントはティリッヒにとって最重要の思想家であり続けた。たとえば、ティリッヒが後期シェリングに関する博士論文を書いた際の枠組みとなった、神秘主義と罪責意識（同一性の原理と断絶の原理）の緊張関係とその統合という問題設定は、後の思想史講義で、「カントとスピノザの総合」と言い換えられるように、カントの提起した思想的課題に対応したものであったのであり、ティリッヒの宗教思想の全体は、カント哲学（人間の有限性と無限者への到達不可能性の認識）以降の思想状況において、いかにしてキリスト教神学は可能なのかという点をめぐっていたと解釈することもできるのである。したがって、まずティリッヒのカント論は、近代キリスト教思想史におけるカントの意義を、多面的なカントの全体

像に即して論じるという形をとることになる（カント論1）。これは、初期ティリッヒにおけるシェリングについての博士論文中のカント論によって、また後期ティリッヒのキリスト教思想史講義におけるカント論によって知ることができる。

こうしたカント論に対して、もう一つの特徴的なカント論は、ティリッヒの組織神学、たとえば、前期になされたマールブルグ講義や、後期ティリッヒの時期の三巻本の『組織神学』に見ることができる。この後者のカント論（カント論2）の特徴は、カントの全体像や思想史的な位置づけというよりも、神の存在論証との関わりでのカント、あるいは宗教哲学の可能性という点に集中したカント解釈にある。このカント論は、カントの批判哲学以降の思想状況で宗教哲学あるいは神学はいかなる仕方でも可能なのかという近代キリスト教思想の根本問題を直接テーマ化したものであるが、またそれはティリッヒ自身の根本問題に他ならない。今回の発表は、こうした宗教哲学の可能性という観点からのティリッヒのカント論に考察が限定される。あらかじめその骨子を示しておくならば、ティリッヒのカント論は、次の二つの側面からカントを捉えている。

一つは、人間存在の有限性を論じ、神の存在論証を批判する批判哲学におけるカントであり、思想史講義で述べられたスピノザに対するカントである。それに対してもう一つのカントは、人間理性にとっての無制約的なものという理念の意義を論じるカント（無制約者の命題）であり、ドイツ観念論へと展開するカントである。カントがこうした二つの側面を有していることは、たとえば、形而上学についてのカントの議論を理解する上で重要な意味を有しており、多面的なカント哲学を単純に一面化しないためにも、常に念頭に置くべきものと言えよう。

### 3 カントと宗教哲学の可能性

近代以降のキリスト教思想は、神の問い、超越の問いはどこから始め得るのかという点について、大きな壁に突き当たることになった。カント批判哲学の影響によって、人間の有限な理性能力では神の存在に到達不可能であるという認識（神の存在論証の不可能性の認識）が広く共有されることとなり、伝統的な形而上学あるいは自然神学に依拠した神学的思惟の基礎付けは困難なものとなった。こうした思想史的状況の一つの帰結が、先に述べた神学のカント主義といえる自由主義神学における神思想の倫理化だったのである。もちろん、こうした状況に対して、キリストの出来事における特殊啓示の事実性から議論を始めるといった方向性も可能ではあるが、ティリッヒが取った道は、しばしば主観的な独断論に陥りがちなこうした方向性ではなく、それとは別の仕方でもキリスト教思想の出発点を見出そうとする試みだったのであり、ここでティリッヒはもう一つのカント哲学の側面に注目することによって議論を展開しようとする。それは、カント以降における形而上学再考の試みとも言えるものである。以下、1946年の「宗教哲学の二つの類型」と題された論文によって、この議論を跡づけてみたい。

1946年の論文で、ティリッヒは神認識の可能性（超越への道）すなわち、宗教哲学の可能性に関して、次の二つの類型を指摘している。第一の類型は宇宙論的類型であり、経験的事実から推論によって神に遡及するという仕方における神認識の道である。その代表としては、トマス其自然神学が挙げられる。それに対して、第二の類型は存在論的類型と呼ばれるものであり、「人間は神を発見するときに、自分自身を発見する」と言われるよ

うに、そのポイントは、無制約的なものが直接的に媒介なしに知性・魂の内に現れるという事態から神認識を開始するという点にあり、この類型に属するものとして、ティリッヒはアウグスティヌスの真理論( 懷疑論に対して、真理はあらゆる哲学の議論の前提であり、真理は神であると主張する。Si fallor, sum。わたしが欺かれるなら、わたしは存在する ) からアンセルムス、デカルトを経てドイツ観念論に至る思想的系譜を指摘する。このように、宗教哲学の二つの類型は、通常自然神学における神の存在論証の二つの類型と言われるものにほぼ対応している。しかし注意すべきは、ティリッヒの意図が、神の存在を合理的に論証する方法の類型化にあるのではなく、神認識の可能性のあり方( 神を問う問いのあり方 ) の類型化という点にある、ということである。ここに、カントの批判哲学以降の思想状況、つまり理論理性による神の存在論証の不可能性の承認を見ることができよう。さらに言い換えれば、神から宗教への、神の存在から人間の宗教性への問題の転換と言うことも可能である。

では、宗教哲学の可能性の問いとは、神の存在論証の方法論ではないとして、いかなるものなのであろうか。それは、ティリッヒが、「神の存在」「我々の精神の中における神の現臨」は「あらゆる思考の前提」であり、存在論的類型は、宇宙論的類型を含めたあらゆる「宗教哲学の基礎」である、また「神は存在そのものである( deus est esse ) という命題は、あらゆる宗教哲学の土台である」、と述べている点に明確に現れている。神の存在論証とは、次のような意味において解釈されねばならない。すなわち、無制約的なもの( 実定的な宗教の宗教的象徴としての「神」ではなく、思惟する自然 = 心、世界概念一般とどのように純粋理性の理念としての神 ) は、確かに合理的な存在論証の事柄ではない。しかし、人間の合理性あるいは有意味性自体が成立し、根拠づけられるためには、無制約的なものが要請されねばならない、と。これは、「理性が要求するところの無制約的なものは必然的に経験と一切の現象との限界を超えることを我々に強要する」( A.XX ) とカントが述べている通りである。このように、宗教哲学の可能性として問題にされているのは、経験の一対象としての「神」ではなく、経験自体の構造において直接的に現前している無制約的なものについての気づき( awareness ) なのである。言い換えれば、人間はそれ自体の存在の中に、超越的なものへの開けの可能性を有しているということに他ならない。この無制約的なものへと開けにおいてこそ、キリストの特殊啓示は人間の認識の事柄となりうるのである。具体的な宗教は、この可能性としての開けを宗教的象徴において具体化したものと言えよう。

ここで、ティリッヒのカント論をまとめておこう。まず、ティリッヒが伝統的に神の存在論証として展開されてきた議論を、神の存在についての論証ではなく宗教哲学の可能性( 神の問いの可能性 ) として解釈した際に、この「神の存在の論証ではなく」という点に、カントの批判哲学のいわば消極的影響が現れている。しかし、ティリッヒにとってのカントの意義はそれにとどまらない。それは、存在論的な神の存在論証に対するカントの批判にもかかわらず、カントの議論が、積極的に、「宗教哲学の可能性として解釈できる」という点に現れている。まさにここで、( 意外にも ) カントはアウグスティヌスを代表とする存在論的類型に結びつけられることになるのである。「宗教哲学の道徳的類型( カントのいわゆる道徳的な神証明にさかのぼる ) は、一つの新しい類型を現している」としばしば言われてきた。しかし、実情はそうではない。道徳的論証は、宇宙論的に、あるいは存在

論的に解釈されねばならないのである。それが宇宙論的に解釈されるときには、道徳的判断という事実が、最高存在に至る推論の基礎となる」(Tillich[1946], pp.294-295。Faktum der Vernunft, res facti。有限性を越える一点・尊敬の感情)、しかし、「道徳的論証が存在論的な仕方では解釈されるときには、道徳的命法がもっている無制約的な性格の経験は、直接的に、推論によらず、絶対的なものの気づき(awareness)となるのである」(ibid.)。道徳的論証についてのこうした二つの解釈の可能性の内、ティリッヒが後者の解釈をとっていること、つまり、カントの言う道徳法則の無制約性、あるいは無制約的なものの経験の直接的な確かさという事柄を、存在論的類型の文脈で理解しようとしていることは、『組織神学』第一巻で、アウグスティヌスの真理論(懷疑論に対する論駁)に続いて、次のように述べられていることから明らかである。すなわち、「カントも同様の仕方では、倫理的内容に関する相対主義が、倫理的形式、すなわち定言的命法に対する絶対的尊敬と、倫理的命法の無制約妥当性の承認とを前提としていることを示した」(Tillich[1951], p.207)、「この点までは、カントもアウグスティヌスも反駁され得ない。というのも、彼らは論証していないからである。彼らはただ実在との出会いすべてにおける無制約的要素を指し示しているのである」。

以上の分析によって、ティリッヒのカント論は、カントを一方において神の存在論証への批判者(批判哲学)と捉えると共に、他方ではカントの無制約的なものの理念あるいは定言命法の無制約性の議論が宗教哲学の可能性を論じる基礎となり得ることを示すという仕方では、これら二つの側面からカント哲学を解釈しているが明らかになった(神の存在から人間の宗教性へという転換の必要性と可能性の両面といってもよい)。もちろん、ティリッヒのカント論(カント論1)は、カントの自由概念や根本悪の問題をも視野に入れたものであり、その全体を論じるには、より包括的な分析が必要になる。しかし、これまでの限定された範囲における議論からも、ティリッヒにとってのカントの意義は十分に明らかであろう。

#### 4 展望

最後に、「ティリッヒとカント」という問題設定が現代の宗教論に対して有する意義について簡単にコメントすることによって、本発表を締めくくりたい。ティリッヒのカント論の意義として強調すべき点は、ティリッヒが近現代の思想状況において神や超越を問う可能性として、人間存在あるいは人間の経験自体における無制約的なものの現前という事態を位置付けたという点にあることは、すでに述べたとおりである。これは、ティリッヒ自身の宗教論(とくに『組織神学』)において、人間存在の存在構造に神の問いが内在しているという議論(神の問いは人間存在にとって本質的であるとの認識)として、つまり、神の問いを人間存在の基礎構造から解明するという仕方では具体化されることになる。その際に、無制約的なものをめぐる議論は、意味概念の分析(意味経験の論理的構造分析)、つまり、意味の形而上学として展開される。それによって、無制約的なものという概念は、より明確な概念規定にもたらされたと言えよう。こうした議論の展開は、ハイデッガーのカント論(ティリッヒの存在論的人間学は、カントからハイデッガーへ至る系譜の上で理解できる)と関連づけうるものであり、またより最近では、パネンベルクの宗教論(人間学から宗教へ、そして神学へ)においても確認可能である。

今回注目した「ティリッヒとカント」というテーマは、こうしたカント以降の近現代の宗教論の系譜を再検討し、そしてさらなる宗教論の可能性を探求する上でも、重要な意味を有するものと言えよう。

< 観念論 > 観念的存在の実在性、真偽という意識・経験において、すでに真理が前提となっている

プラトン

アウグスティヌス、真理論

カント、道德意識

< ボンヘッファー >

神学的な概念形成において、超越論的哲学の範疇を用いるべきか、存在論的な概念を用いるべきかの選択の問題。

啓示概念から認識論へ。啓示の行為的な解釈と存在的な解釈

行為と存在の弁証法は、神学的にキリストの信仰と教会の弁証法として認識される。

人間は自己に課した限界から、すなわち自己自身から自己を理解する純粋な行為としての存在

バルトの概念世界は超越論的な方向に傾いている

すべての可能性に対する啓示の絶対的自由、啓示は聴く人に起こるものであり、しかも各瞬間において、その関係を止揚する神の自由の中で起こる。神は純粋な行為として理解される。

啓示の存在に関する存在論的解釈は、啓示を原理的に意識を超越する「対象的な」ものとして規定している。啓示の本質が教理として理解されるならば、啓示は存在概念にしたがって理解されるであろう。

カトリックと古プロテスタントの教義学